

世
紀
を
越
ゆ

顔がない 割れた鏡のうちにもそとにも

石畳 踏めばかんかんと死者の手が伸びてくる

鳩の目に血の風光らせ 爆心地嘘のない広さもつ

鳩 赤い胸のうちをぶら下げたまま時間の真円を歩く

踏切の向こうに 冬の花火がカラリと上がった

ハンカチ 落ちている夜の線路をまたぐ

孤絶の月をかかげ 蒼い島である

俺にもくれた広告を 黙って捨てる

光 光に向かって戻ればよい

その向こう にあるのかもしれない

岩のような重しが いつも頭上にある

風邪這いのぼりきて 背中にとまっている

離れ犬円描き走る 鈴リンリン鳴らし

蟋蟀飛んだ 石畳からキチキチキチと

玄界灘荒るれば 魔界の扉と口開く

荒るる灘 虎落りの息を吐きやまず

次々と次々と波 湧き起こり

煤雲が足元から這いのぼりくる 今朝の夢

今朝の夢は暗示かもしれぬと 息を吐く

何気ない仕草が 己を晒している

ある阿呆ある阿呆と呟き 吾を観る